

第13回県政知事懇談

湯崎英彦の地域の宝 チャレンジ・トーク (大竹市)

と き 平成27年8月29日(土)

ところ 大竹市立図書館(ギャラリーおおたけ)

	目 次	頁
開 会	1
知事挨拶	1
事例発表者紹介	3
事例発表①-1	4
事例発表①-2	10
事例発表②	14
事例発表③	20
閉 会	25

広 島 県

開 会

○司会（豊田）

皆様。改めましてこんにちは。大変長らくお待たせをいたしました。

ただいまから、「湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」開催いたします。

私は、広島県広報課の豊田と申します。本日は、チャレンジに向けて元気の出る会にしたいと思います。どうかよろしく願いいたします。

（拍手）

知事挨拶

○司 会

それでは初めに、湯崎英彦広島県知事をご挨拶を申し上げます。

●知事（湯崎）

皆様，こんにちは。

今日は土曜日で、お休みの方も多いのではないかと思います，その中でお集まりをいただきまして本当にありがとうございます。

この、地域の宝チャレンジ・トークですが、県政知事懇談というものなのですが、私がもう6年になろうとしてるんですけども、就任直後から県内の各市町、23市町ありますけども、そこで開催をさせていただきまして、今、実は4巡目に入っているところです。

大竹市は3回目でありまして、2回目の時には各市町ではなくて、県内8地域に分けてやったものですから、大竹は廿日市と一緒にさせていただいて、大竹では3回目ということになります。前回参りましたのはもう既に3年前になってまして、たまたまの順番なんですけど、ちょっと間があいてしまいました，またこうやって大竹に来られて大変うれしく思っています。

また、この開催に当たりましては、入山市長をはじめとして大竹市の皆様に大変お世話になっておりまして、この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。

もともこの県政知事懇談会というのは、いろんな目的でやってるんですけども、1つは県政に対して皆さんいろんな方のご意見をいただいたり発表いただくのですが、そういうものを県政の肥やしにするというか、今日も後で発表があるんですけど、ラー油とか佃煮についての発表もあるんですけど、この、漬け込むとですね何かおいしいものができるというですね、味噌樽と呼んだりしてましたけども、いろんなご意見を一つ一つがどうこうということよりもですね、ため込んで漬け込むことによって、おいしい県政の味つけができればなということで、これまで541人の方に発表していただいております。大竹市でも27人の方が、大竹市民の方に発表いただいております、そういう意味では大変な蓄積とい

いますか、大きな味噌樽にいっぱいおいしい味ができてきたかな。生七味には負けるかもしれないけど（笑）、美味しくなってきたのかなと思っています。

もうひとつは、各市町でいろんな活動をされてる方に発表をいただいているんですけども、皆さんが、本当に聞いて、ああよかったっていうふうにお帰りになられると思います。そういう元気が出るお話をいただきますので、ぜひ、今日お集まりの皆様も今日の発表を聞いて元気をもらって、お帰りいただければというふうに思っています。

今日は実は、午前中阿多田島に行ってまいりました。阿多田島で3箇所の現場を訪問という形でさせていただいたんですが、1つ目は漁協で広島レモンとハマチをコラボさせてですね「ハマチ to レモン」という、ブランド化の取組を拝見させていただきました。ちょうどこの、これ餌なんですけどね、この餌をやると何かすごい……動画にするとよくわかって、これ魚の写真は出てこないの。ああ、これこれこれ。もうこんなに大きくなってましてですね、ところがこれまだ出荷の大きさではないそうで、12月ぐらいにもっと大きくなって出荷するそうです。あそこにバシャバシャなってますよね。これが全部ハマチで12メートル四方の中に2,000匹かな。2,000匹ハマチがいらっしやると。（笑）何でいらっしやるかっていうと、1匹もう、何千円もするそうです。大きくなると出荷のときには大変高級な魚であります。

それからその後、大井水産さんの加工場に行きまして、県内2位の漁獲量を誇りますイワシを漁獲してイリコをつくるんですね。これその様子ですけども、それを拝見させていただきました。音戸のイリコとか有名ですけど、阿多田島のイリコも大変有名でありまして、広島県第2位ということでもあります。

こういう感じで全て手でより分けるらしいですね。これも驚きました。ほんとにこれもなかなか見れないものを拝見をさせていただきました。

そして、最後に、大漁丸というところにおじゃまをしました。海上釣り堀なんですけども、海上で釣り堀をつくってやってそこでいろんな高級魚が釣れるということで、大変人気の釣り堀です。夏の時期は少し魚の食いつきが悪いということなんですけども、9月10月からですね、もういっぱいになるそうでもありますけども、これを拝見させていただきました。阿多田島はなかなか行く機会がなかったんですけども、初めて行かしていただいて、ほんとに島の暮らしというのがある意味全然違うというか、海と暮らしてるなっていうのを実感させていただいたところでもあります。

今日の懇談では、これからですね大竹市でさまざまな地域の活動あるいは学校で活動されている4組の皆様に発表をいただくことになっております。先ほど申し上げたように、とても元気がいただけるんじゃないかなというふうに思っていますので、どうぞよろしくお願いをします。

それでは、改めて今日はどうもありがとうございます。

（拍手）

○司 会

湯崎知事，ありがとうございました。それでは，檀上の席のお移りください。

事例発表者紹介

○司 会

それでは，本日の事例発表者の皆さんをご紹介いたします。発表者の皆さんは，檀上のほうへお上がりください。

皆さん向かって左からご紹介させていただきます。一番左。玖波の町を元気にしていくため公民館を拠点に活動されている玖波公民館職員の河内ひとみさん。

○事例発表者（河内）

よろしくお願ひいたします。（拍手）

○司 会

公民館活動から派生した自主的住民グループ地域ジンの伊藤信子さん。

○事例発表者（伊藤）

よろしくお願ひいたします。（拍手）

○司 会

同じく地域ジンとして大人と一緒にあって玖波のまちづくりに取り組まれている市立玖波中学校2年生の大江春花さん。（拍手）山本礼人さん。（拍手）野田優人さん。（拍手）

続きまして，異業種の会社代表が集まり大竹の特産品開発に取り組まれている大竹特産ゆめ倶楽部の二階堂節男さん。（拍手）島原みずほさん。（拍手）

続きまして大竹市の特産品を用いたアイデア料理を開発し，普及に努めておられる県立大竹高等学校3年生の立花真優さん。（拍手）坂井麻友美さん。（拍手）木下明美さん。（拍手）どうもありがとうございました。

事例発表者の皆様は一度お席にお戻りください。

ここからは湯崎知事にコーディネーターをお願いしたいと思います。それでは湯崎知事，よろしくお願ひいたします。

事例発表

●知 事

それでは、本日事例発表していただきます4組の皆様に来ていただきましたけれども、皆さんは地域や職場、学校で積極的にいろいろな活動に取り組み、挑戦を続けておられる方々です。

初めに発表していただきますのが、玖波公民館を拠点に地域を元気にしようと取り組んでおられる二組の皆さんに続けて発表いただきたいと思います。

最初に発表いただきますのが、玖波公民館職員の河内ひとみさん、そして地域ジンの伊藤信子さんです。

その後、続いて発表いただくのが、市立玖波中学校2年生の大江春花さん、山本礼人君、野田優人君の3名であります。

この皆さんが活動の拠点とされております玖波公民館ですが、住民の参加交流型学習を取り入れた「学びのカフェ」というのを4年前から開催されておまして、住民同士の繋がりの場を提供されているということです。

この、学びのカフェから住民の自主的な活動グループ「地域ジン」が生まれたことで、住民の交流がさらに活発化したということで、「学びのカフェ」は「地域ジン学びのカフェ」へと発展しまして地域課題の解決に向けた取組のほか、商店街活性化を目的とした「見知らんガイドマップ」づくりであるとか、「スタンプラリー大会」などを実施されているということです。

さらには、新たに立ち上がりました「まちカフェプロジェクト」によって町を上げての大規模なイベントを行っておられます。そしてこれらの活動で大人たちが頑張っているのを見て「中学生地域ジン」が誕生したということで、公民館と地域、学校が連携協同して多世代交流のまちづくりを実現しておられるということでもあります。

なお、この玖波公民館は、皆さんご存知だと思いますけれども、こういった取り組みが評価されまして、昨年度文部科学省の優良公民館表彰の最優秀館を受賞されておられます。

今日の発表のテーマは『学びのカフェ物語』①～ひとが変わり まちが変わる～』そして中学生の皆さんには「続『学びのカフェ物語』②中学生版中学生地域ジン誕生～大人が変われば子供が変わる～」です。

それでは、二組の皆さん、どうぞよろしくお願いします。

(拍手)

事例発表①-1

○事例発表者(河内)

皆さん、こんにちは。(「こんにちは。」の声あり)今日は、湯崎知事にお会いできてほんとうにうれしく思います。1部2部一緒に、大人版と子供版をあわせて発表したいと思います。よろしく願いいたします。これはノンフィクションの物語です。

ひとが変わり、町が変わる。学びのカフェ物語。この物語は玖波公民館の自主事業学び

のカフェの学びを通じて誕生した地域ジンが町を元気にしていくお話です。

この物語は3章からなっています。第1章学びのカフェスタートです。学びのカフェを開催していくことにより、住民同士の横のつながりを構築し、第2章は地域課題とともに地域課題を住民とともに学び考える、地域ジン学びのカフェにバージョンアップしていきます。第3章地域ジンまちカフェプロジェクトが誕生していきます。この物語、1章2章3章と2年間、2年間、2年間と5、6年かかってしっかり行っています。この物語に登場する地域ジンとは学びのカフェ受講者のことです。物語の舞台である町と公民館を紹介いたします。

大竹市は広島県の最も西に位置し、市の東側に玖波という町があります。玖波はかつて西国街道宿場町として栄えていましたが、現在も美しい白壁の美しい町並みが残る歴史と癒しの町です。しかし、現在では人口が減少し、高齢化が進んでいます。玖波公民館は昭和49年に設立され、今年で40周年を迎えます。

それでは物語を始めます。この物語は、4年前に始まりました。

第1章学びのカフェ。平成23年7月スタートです。そのころ玖波公民館はいつも同じ固定客のみが利用している貸館状態でした。また、公民館の職員は私1人です。何とかしたいと毎日考えていました。そこで貸館からの脱皮。マンネリ化していた公民館事業の改革のため学びのカフェを思いつきました。

では、なぜカフェ？ネーミングの学びのカフェのカフェとは、居心地がよく、ゆったりできる空間です。さまざまなテーマについて自由に語り合うスタイルの活動、カフェ。

最初に行いたかったことは公民館のイメージチェンジです。公民館は暗い、ダサイ、野暮ったい。そんなイメージから明るいおしゃれな学び空間にしたいと思いました。

それではなぜおしゃれ空間にしたいと思ったのか。それはもっと多くの方に公民館に来てほしい。そしてみんなで町を元気にしたい。みんなで地域課題の解決に取り組みたいと思いました。玖波公民館の自主事業の改革を考えました。

それでは学びのカフェとはどんなものでしょう。

まず1つ目。参加型交流。地元住民の参加意識を変える。従来は講師の話聞くだけのお客様状態から自分たちが参画していく講座。

2つ目。地域の触れ合う時間、空間を持つカフェタイム。

3つ目。地元の地域資源。歴史、文化、人材を発掘し、眠っている宝を輝かせる場。

そして4つ目。講座、講演のテーマをタイムリーな題材にする。

そして5つ目。広報媒体を現在社会のニーズにマッチさせるためフェイスブックやブログを活用しました。ほかにも多様な学習者のニーズにこたえるため、聴覚障害者の参加時にはアイパッドを利用した要約筆記を行ったり子供連れの参加者には託児の受け入れなどを行いました。

学びのカフェは毎月1回土曜日午後専門講師による講座、講演を2年間継続して行な

いました。募集は参加者がチョイスしやすく、マンネリ化を避けるため毎回募集としました。内容をご覧のとおりです。例えば紅茶講座。マイセン、ウェッジウッド入門と題してティーカップを学びながら各自自慢のカップを持ち寄り、おいしく紅茶を飲んだり、メイドさんが登場して貴婦人の気分を味わったりと。また地元のヨットマンの講座を企画し、講座終了後には近くの港に行き実際に太平洋を1周した本物のヨットに乗り込んで船内見学をしたり航海したり、どの講座も工夫を凝らしました。

それでは第1章学びのカフェの成果をお話しします。2年間継続して行った講座講演は地域の人々に定着していきました。

まず、広報媒体を従来の紙媒体、公民館だより、市の広報誌に加えフェイスブックやブログを立ち上げリアルタイムで情報発信を行いました。また、おしゃれな学び空間の提供ができたので公民館のイメージチェンジに成功しました。そして新規来館者が少しずつ増えていきました。

さらに学びを入れた参加型交流を継続してきたことで、今後の住民同士の横のつながりの土壌ができていきました。

しかし、第1章の学びのカフェでは、まだPDCAサイクルが完全には機能していませんでした。物語は第2章にバージョンアップしていきます。第1章の学びのカフェでは触れ合いやリラックスを重視していましたが、講座内容は主に楽しいメニューでした。第2章ではグループワークで地域課題を発見し、その解決に向けて取り組んでいきます。参加者は主体性を持ち意欲的に事業の企画立案を行うようになっていきます。名前も学びのカフェから地域ジン学びのカフェへと変えていきました。

そしてここについて「地域ジン」が誕生します。「地域ジン」の「ジン」とは「人」のことです。共通の仲間意識を持ち新しいコミュニティづくりを目指していく集団の愛称です。町を元気にするために乗り出していく地域ジン。テーマカラーは「ブルー」です。グッズもどんどん誕生しました。みんなで共通の持ち物を持つことで結束が強まります。各自が責任を持った行動を行うため、地域ジン名刺をつくりました。そして地域ジンTシャツ、うちわ、のぼり。会場にたくさん飾っております、こののぼりのことです。

そして地域ジンがつくったテーマソングCDができました。講座、講演の演題幕は地域ジンの手づくりです。知性と感性を共有しておしゃれ感を出し、好感度アップを目指しました。こちらは先ほど紹介したテーマソングです。タイトルはだからこのまちが好き。玖波のよさが伝わってきます。学びのカフェの始めや終わりにこの曲を流しています。この曲が町のあちこちで、例えば郵便局、信用金庫、スーパー、駅のホームに降り立ったらこの曲が流れていたら素敵だなあという思いも込めています。この曲をつくられた方は草津さんという地元のシンガーソングライターです。地域ジンの方でもあります。

それでは活動の様子です。

(映像)

受講者は積極的に意見を出し合っています。

福祉講座を行いました。

地元の講師の講座もたくさん行い、地元の人材発掘にもつなげていきました。

後半には大人だけでなく中学生の参加もたくさんあります。

「地域ジン学びのカフェ」で学んだ地域ジンがいよいよ町に向けて動き始めました。「玖波ミシュラン」いえいえ、「玖波見知らんガイド」です。マップづくりに乗り出していきました。これは地域デビュー講座グループワークの中で地域ジンによって発案されたものです。町の飲食店の活性化のため、地域ジンが地元の商店に取材に行き、店を紹介するオリジナルマップをつくりました。このマップを利用し、1カ月のスタンプラリーを行い、公民館での抽選日には約200人の参加がありました。このことが町の人に地元の商店を知ってもらうきっかけとなりました。

それでは「第2章地域ジン学びのカフェの成果」をお話しします。

まず1つ目。ネットワークが広がりました。「地域ジン」が町へ向けた活動が活発になり地元の企業、自治会、学校など数多くの団体と連携協力が可能となりました。

2つ目。地域デビューを行うための入門、計画、実践の連続講座を行ったことで地域課題への関心が高まってきました。団塊世代の定年戦略を学び、男性の受講者も増えていきました。

3つ目。「地域ジン」同士の仲間意識が高まり公民館とともに頻繁にミーティングが行われるようになりました。事業の企画、立案ばかりでなく、事業実施後にも振り返り見直しを行うことで「地域ジン」と公民館による学びのPDCAサイクルが回り始めました。

第3章地域ジンまちカフェプロジェクトの誕生です。平成25年。このプロジェクトは町を元気にすることに意欲的となった地域ジンが公民館とともにさまざまなイベントを企画していくものです。このプロジェクトの最大行事、「まちカフェレトロ体験イベント」を開催しました。このイベントではまず、ふるさとお宝写真館、地元の講師によるふるさとリレー講演会、新名所うだつストリートをつくりそこを散策しました。マップもつくりました。マップ片手にレトロファッション。そして古民家にて蓄音機コンサートを行いました。参加者もスタッフもみんなレトロな服装で町を練り歩き、昭和レトロムードで盛り上がり、多世代交流の大イベントとなりました。地元の歴史や文化を知ることによってふるさとを愛する心を育み、町のよさを再認識してもらうことができました。

地域ジンが続々誕生して町へ向けた活動は子供たちの心を動かしていきます。大人が変われば子供が変わる。全校生徒70人ぐらいの玖波中学校の生徒が、私たちも地域ジンの一員とまちカフェイベントにどんどん名乗り出ていきました。このことでさらに地域を巻き込む大イベントに発展しました。町の大人が変われば子供が変わっていきます。

玖波中学校とは平成23年から地域連携の玖波スクラムを立ち上げ、公民館と学校と地域の連携がとてもうまくとれています。これはとても継続しております。

中学生が企画したプロモーションビデオをご覧ください。

「皆さんこんにちは。玖波中学校代表 鈴木です。のこのたび玖波公民館と玖波中学校と協力してまちカフェプロジェクトを催します。ぼくたちも頑張りますので皆さんもぜひ見に来てください。」

鈴木君です。

「今、玖波が熱い。」

去年の中間です。もう卒業して今、高1になりました。

それでは先ほどの「まちカフェレトロ体験イベント」の様子をご覧ください。

この曲が学びのカフェのテーマソングです。2階ではふるさと講演会を行いました。これ皆さん全部中学生です。ここは中学生ではないです。(笑) 地域ジンです。

ここはまた中学生です。初々しい人たちはみんな。

ここも帽子とか全部手づくりでみんな。ここが新しい名所をつくりました。うだつストリートと名づけて、すてきな町並みを。

ここが古民家。空き古民家があります。そこを利用してまちカフェというカフェをつくりました。これここに今飾ってます垂れ幕です。これがこの古民家を利用してここで蓄音機コンサートを行いました。

地域ジンまちカフェプロジェクトの成果です。レトロマップを完成し、新名所うだつストリートが誕生し、空き古民家の活用を行ったことで町のよさを再発見することができました。

さらに地域ジン中学生の誕生により学校と地域のつながりがより強くなり、多世代にわたって交流ができてきました。そして学校も含め地域をまるごと巻き込み、町の活性化につながっていきました。このまちカフェは300人参加しております。

それでは最後に物語のまとめに入ります。事業全体の成果です。学びのカフェ実施前の平成20年では事業の年間参加者はわずか220人でしたが、平成23年度には学びのカフェが始まり約3倍の640人に増加し、地域ジン学びのカフェを実施した25年度にはさらにその3倍の1,879人に増加しました。今年度においては既に2,000人を超えております。

事業におけるネットワーク。目標をはるかに上回り、21団体ものネットワークに広がっていきました。フェイスブック、ブログの更新は年間365日以上行っています。

学びのカフェ物語がもたらしたもの。それは人が変わり町が変わりました。公民館が核となり地域課題を見つけ、その解決に向けた取り組みを行ったことで地域のネットワークが生まれ、地域住民を主体とするまちづくりが行われました。このことで、これまで全く公民館に来ていなかった新規来館者が大幅に増え、それと同時に地域ジンが誕生し、物語の中で自分の役割を見つけ、町を元気にすることに主体的に取り組みました。そして、そ

の姿を見た中学生が自ら地域ジンの仲間に加わるなど、地域の新しい担い手が育つ土壌となりました。

一番大きなことはふるさとを愛する心がみんなに芽生え、忘れかけていた玖波のすばらしさがよみがえったことです。これからもコーディネーター役としてぶれることなく地域の活性化、情報発信、絆づくりをみんなと一緒に頑張っていきたいと思います。自分も輝いて地域も輝く課題を見つけて地域の活性化を。小さいけれど大好きな玖波から発信し続けていきたいと思います。

物語はさらに今、4章5章と進んでおります。まだまだ目が離せない「地域ジン」の動きです。

(映像)

玖波の町に笑顔が増えました。こんなにたくさんの笑顔が揃いました。だから、だからこの町が大好きです。

最近の、一番最新の玖波公民館の様子です。

これ、玖波公民館のホール、体育館なんですけど、みんながほんとに本当の笑顔で楽しんでおります。発表者じゃないんですけど、会場のほうが発表者みたいな感じで楽しんでます。中学生も突然出てきて飛び入りで一緒に踊って楽しんでおります。

それでは地域ジンの声です。

○事例発表者（伊藤）

私は今、紹介されまして「地域ジン」の1人の伊藤信子でございます。地域ジンの皆さんはあそこに勢ぞろいしていますけれど、今、画面を見られてそのとおりでね。大竹市玖波の小さな公民館が1人の、河内さんの改革で、今、本当によみがえっているようなところなんです。何度も学びのカフェっていうふうなのが出ていましたけれど、私たちも最初は学びのカフェって何ねっていうな感じで3年ぐらい前から参加していくうちに、河内さんの情熱でそこに学んでる私たちも横のつながりもできましたし、また、出席することが楽しくってワクワクして、その会には玖波の地元の人たちの講師を選んでくださいねって河内さんに申しあげましたら、気持ちよくそれを取り入れてくださって、そういう会が進んでいくうちに、会がもっと私たちに身近にいい会になっていったような気がします。

これからももっとこの勉強を学びのカフェで勉強をすることを続けながら、これからはもっと地域と公民館っていう隔たりをなくするように私たちの地域ジンの役割があるんじゃないかと思っております。もっと元気になってまいりますので、どうぞ、知事さん。大竹の玖波の町を覚えていただいてよろしく願いいたします。

じゃあ、頑張りましょう。（「頑張りましょう。」の声あり）

(拍手)

○事例発表者（河内）

はい。それでは大人が変われば子供が変わる。地域ジンが続々誕生して町へ向けた活動は子供たちの心を動かしていきます。大人が変われば子供が変わる。どうぞ。

中学生地域ジンの声です。

中学生地域ジン紹介いたします。大江春花さん。パチパチパチ。(拍手)

それと、山本礼人君。(拍手)

野田優人君。(拍手)

皆さん、中学校2年生です。いずれも、昨年も今年もまちカフェ、くばコレ全て参加してくださってる中のお1人2人3人です。今日はちょっと発表をしていただきます。

では、大江さん。

事例発表①-2

○事例発表者（大江）

私が、まちカフェやくばコレに参加しようと思ったきっかけは、小学校で習った玖波地区にある歴史のあるものの中で、うだつの近くでボランティアができるのがいいと思ったからです。また、浴衣を着てボランティアをするのが珍しいので、ぜひ私も出てみたいと思いました。

去年のまちカフェと一緒に参加した先輩方が自分から進んで地域の方に声をかけて手伝いをしている姿を見せてくれました。そんな先輩方がとても頼りになると感じていました。

まちカフェやくばコレに参加する前は、地域の方とのかかわりがあまりなかったので、ボランティアで参加することでたくさんの方々との交流をすることができました。

これからも学校でのボランティア活動に積極的に参加し、また、先輩方のように普段の生活の中でもいろいろなことに挑戦していきたいと思います。

(拍手)

○事例発表者（山本）

僕は、くばコレに参加してみて感じたことがあります。それは地域の人との絆が深まったことです。この前あったモデルファッションショーでは中学生と地域の人たちが会を盛り上げて、大歓声の中ステージに立ててとてもうれしかったです。

その中で、僕に地域の人たちがステージに立つ前に、「失敗しても大丈夫。」と言ってくれて勇気づけられたり、「手伝ってくれない。」などのように友達みたいにして接してくれたので、心が温かくなりました。

このように僕たちは、日ごろから地域の人に積極的に話しかけたり、笑顔で挨拶をしているので少しずつつきずなが深まったと感じました。これからも地域の人との交流をたくさ

んしていきたいです。

(拍手)

○事例発表者（野田）

僕は、これまでまちカフェを初めとして敬老会や公民館まつり、くばコレなどさまざまな公民館の行事にボランティアとして参加しました。

僕がボランティア活動に参加しようと思ったきっかけは、玖波公民館のボランティアに参加して地域のまちおこしをしている先輩方を見て自分もやってみようと思ったからです。僕は、ボランティアに参加する前はあまり自分から進んで行動することはありませんでしたが、ボランティア活動に参加していくにつれて積極的に行動するようになったと思います。僕は、まちカフェやくばコレに参加してみて、地域の人々が玖波の町を盛り上げようと頑張っているのを強く感じました。だからこそ自分も玖波の住民の1人として頑張らなくてはと思いました。これからも僕は進んで公民館の行事にボランティアとして参加し、まちおこしを手伝っていきたいと思います。

(拍手)

○事例発表者（河内）

夢の多世代交流が実現ということで、実現に向けてまだまだ頑張っています。

地方創生、公民館から発信していきたい、そういう思いもあります。

それでは、ご清聴ありがとうございました。ほんとにありがとうございました。

(拍手)

●知 事

はい、ありがとうございました。

河内さん、伊藤さん、そして大江さん、山本君、野田君、本当にありがとうございました。

少しご質問をさせていただきたいんですけども、まず、河内さんは今、玖波公民館の職員ということで、いつごろから玖波公民館にいらっしゃったんですか。

○事例発表者（河内）

玖波公民館に働きだしたのは10年です。10年前です。

●知 事

10年ぐらい前から。

○事例発表者（河内）

はい。

●知 事

それからずっと活動している中で、何かしなきゃなあという思いが募ってきたのですか。

○事例発表者（河内）

はい。ずっと積もってきて5年ぐらい前から、はい。事を起こし。（笑）

●知 事

その前もやっぱり公民館とかそういう関係でお仕事をされていたんですか。

○事例発表者（河内）

そうですね。その前も、公民館のお仕事をしておりました。公民館の仕事は16年目ぐらいになってますけれど。

●知 事

なるほど。公民館だから市の職員なんですね。

○事例発表者（河内）

そうですね。

●知 事

ああ、そうですね。多分公民館だから、別に貸館状態でも誰に文句を言われるわけでもなし、給料もらえなくなるわけでもなし、ほっといてもそのままでもいいじゃないですか。でもどうしてやろうっていうふうに思われたんでしょうね。

○事例発表者（河内）

そうですね。やっぱりこのままではいけないというふうに思ってきて、一步一步始めていったんですけども、このままでは公民館の本当の意味とか、何かそういう必要性とかそういうものがだんだんとずれてきてはいけないなということを思いましたので、はい。

●知 事

なるほど。そういう中で伊藤さんも巻き込まれてきて。（笑い）

伊藤さんはどうして参加しようというふうには。

○事例発表者（伊藤）

私は、平成9年から公民館に習いもので行ってたんですね。公民館っていうのは習いものの場所だったんです。ところが4年ぐらい前から彼女がそういうカフェで、土曜日に集まりの会がありまして、そこに参加しましたけれど、彼女が1人でやられてるから何とか少しお手伝いできたらなっていう感じで。そういう感じを持たれてるのが皆そこにいらっしゃる方なんですけれど。

●知 事

なるほど、なるほど。

○事例発表者（伊藤）

皆それぞれ個性がありまして、いろいろな分野でエキスパートなんですね。音楽をつくられた方もいらっしゃるし、ブログの担当もいるし、そういう感じでした。おりました。

●知 事

なるほど。何か河内さんが頑張ってるのを見て何かほっとけんなあと。もう、私たちの公民館じゃし。ね。

○事例発表者（伊藤）

そう。いや、それはほんとにみんな感じたと思います。

●知 事

ああ、なるほどなるほど。で、今度はそれが中学生にわたって行って、さっき発表の中でも先輩が参加してるのを見て自分たちもやってみたいなあって思ったっていうふうにおっしゃってましたけど、中学生もね、結構いろいろ忙しいじゃないですか。ゲームやったり、(笑い)勉強もあるけど、ね。この地域の活動に携わるってのはなかなかないと思うんですけど、どうですか。やってみて。誰か。

○事例発表者（野田）

やってみて緊張したりとか、大変だったりすることもあるんですけど、ボランティアが終わったときにはやったなと達成感があります。

●知 事

ああ、なるほどね。

○事例発表者（野田）

また次のボランティアに参加して、またそこで達成感が得られると思います。

●知 事

なるほどね。最初は河内さんに、しかも5年、既に玖波公民館で働いておられて、いや、このままじゃいけないよねっていう思いから始まったのがですね、こんなにたくさんお兄さんお姉さん方が参加されて、学びのカフェから地域ジンに発展をして、さらに中学生地域ジン。中学生も別に、あなたがやりなさいよって言われてやったわけではないんだよね。大人たちが頑張ってるのを見て、今度は私たちもやろうというふうに思って参加したということですよ。

河内さん、公務員ですから、別にほっといてもクビにならないんですよ。(笑)でも、やっぱり何かやろうっていう、この一歩が、こうやってどんどん広がってきた。そして、なんと文部科学大臣から最優秀賞をもらうというところまで来たという。でも、100メートルの崖から飛び降りたとかいうようなことではないんだと思うんですよ。ちょっと何かやってみよう、違うことをやってみようというところから、それが一歩出ることによってどんどん輪が広がって、どんどんどんどん広がっていったっていうことじゃないかなと思います。本当に、素晴らしいことだと思います。

ぜひまた、いろいろな地域でもこういった活動が増えていくんじゃないかなと思いますけれども、今日こうやって共有をいただきました、河内さんを初めとして、地域ジンの皆さん、そして玖波中学校の大江さん、山本さん、野田さん、本当に発表ありがとうございました。

皆さんどうぞ、もう一度大きな拍手をお願いします。

(拍手)

事例発表②

●知 事

はい、ありがとうございました。

それでは続いて参りたいと思います。

次の発表は、「大竹特産ゆめ倶楽部」の二階堂節男さんと島原みずほさんをお願いします。

お二人を改めてご紹介させていただきますと、お二人が所属されている、「大竹特産ゆめ倶楽部」。異業種の会社代表が集まり、設立されたということでもあります。市内の山間部の休耕田を活用した畑づくりから始めて、栽培、収穫、加工、商品販売まで一貫をして取り組んで地域の特産品を売り出しておられるということでもあります。

今日の発表のテーマですが、「大竹特産ゆめ倶楽部の歩みと商品説明。4人のおじさんの情熱と根性が大竹を変える」です。

それでは、よろしく申し上げます。

(拍手)

○事例発表者（二階堂）

皆さんこんにちは。すいません。ばたばたしておりますが、5人の男たちの夢から始まった休耕田開拓プロジェクト。本日のご案内は「大竹特産ゆめ倶楽部」の二階堂節男と島原みずほがご案内申し上げます。よろしくお願ひいたします。

(拍手)

地域資源を活用した商品づくりを目指し、意欲ある異業種の会社代表5人が集まり、平成22年4月、広島県雇用創出基金事業を大竹市より受託し、その目的に沿った雇用対策を新規に5名を雇いました。

それから、大竹市栗谷の谷尻地区において荒れ果てた休耕田の野焼きや、重機による整地を行い薫炭をつくったり、腐葉土をつくって肥料や石灰の散布によって、今まで荒れ果てたものを新たな農場に再生し、栽培した唐辛子をつかって「ちょこっと贅沢」をブランドテーマに、大竹かきみそラー油の開発に取り組みました。

これは、唐辛子栽培の植えつけ作業の様子でございます。唐辛子は7種類1,000本の植えつけをいたしました。

私どものポリシーとして、製品には自家栽培の原料にこだわり、有機肥料で育てたトウガラシ、大豆、ショウガ、ニンニクやキクイモ、ゴマ、安心安全な商品づくりを心がけています。

食べるラー油にはメンバーの経営する玖波でとれたカキを使用いたしまして、使用済みそなんですが、麴から作りまして手作りし、この麴ができ上がりましたらみそをつくります。

これがみそをつくっている現場でございます。ラー油も自家栽培のトウガラシを使用してラー油をつくっております。そこで全部を調合いたしまして、その結果、製品として広島かきみそラー油の完成です。とてもおいしく海外からも注文が入ってまいります。

これはキクイモの花です。少し黄色に菊の花みたいなのが頂上についているのがわかると思いますが、背丈は大体2メートルを越すようなまでございます。この根元には芋ができておりまして、これが糖尿を改善するイヌリンをたくさん含んでおります。天然のインスリンと呼ばれております。

お茶も加工しております。クリはクリジャムとして我々も販売しております。

市からの委託事業は平成23年度で終了いたしました。自立できる事業として原木シイタケ栽培を一方の柱として育て、年間出荷を目標に現在1万2,000本のほだ木で頑張っております。時折シイタケ狩りの募集やシイタケのオーナー制度の募集も行っております。

主な商品は、広島かきみそラー油、生七味、椎茸かき佃煮、蜂蜜ショウガジャム、クリジャム、キクイモ茶、原木生シイタケ、原木干しシイタケ、切り干し大根、大根の生うま漬けを初め、オイスター焼きそばソースなどでございます。

主な販売先は、広島夢ぷらざ、広島ブランドショップT A U、東京駅中ニッコリーナ、川中醤油、ゆめタウン廿日市、大竹店、J A直産ふれあい市場、サンケイ会館、マロンの里、地元大竹の小売店、広島生協、まるじょう、ナビバード。これは海外 120 カ国に販路を持っております。その他、大竹駅前土曜夜市や佐伯町軽トラ市などのイベントに参加してPRしております。

今日も、エディオンスタジアム広島でサンフレッチェの試合がありますが、オイスター焼きそばソースを使った焼きそば販売PRをしておるはずでございます。多分、雨でもテントがあるからやるということでした。

原料の産地がわかっておりますので、安心安全の商品づくりで、これに重点を置いたゆめ倶楽部が行っている6次産業化への取り組みへの注目も高まって、地元メディアから取材依頼が昨年3カ月の間に他県を含めて6つのテレビ局が、生七味や広島かきみそラー油の特集が放映されました。この放映の後、さすがに多くの反響がありまして、喜んでおるところですが、新聞各紙もいろいろなところで私どものPRをしていただけるようなものが取り上げられております。

そして、今年4月ですが、東京駅中ニッコリーナ店で生七味が初入選して大賞をとるという嬉しいニュースが入りました。東京駅で販売しておるとのことでございます。

平成24年6月に合同会社を設立法人化し、農業生産法人合同会社大竹特産ゆめ倶楽部として6次産業化を推進し、現在に至っております。これからも皆さんに安心安全な商品をお届けできるよう、我々は頑張りたいと思っております。

以上で我々の紹介を終わります。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

●知 事

二階堂さん、島原さん、ありがとうございました。

最初は雇用創出基金事業から始まったということで、これは県が大竹市経由で行っている事業なんですけれども、これは評判が悪い事業で、(笑)なかなか雇用が続かないですとか、いろいろあるんですが、委託事業が終わっても、今、続いていらっしゃるということですか。

○事例発表者(二階堂)

そうなんです。

●知 事

すばらしいですね。

○事例発表者（二階堂）

ええ。あまりこういったことも言いたくはないのですが、事業として（市からの）委託事業だけで将来的にずっとやっていくというのは大変難しいことだったと思います。先ほどもちょっと紹介いたしましたのですが、製品の安心安全というのをモットーにやっております関係上、いろいろな人から美味しかったというようなことから販路をつくってきておりますが、まだまだ販路については十分とはいえておりません。先ほどの会合の中でフェイスブックを利用したりとかいうことで、もう少しPRしたらどうかという話をいただきましたが、それをまた生かしていきたいなと思っておりますし、湯崎知事も、何かお話を聞きますと、ラー油や生七味をご賞味いただいて喜んでいただいておりますのを、大変うれしく思ってます。

●知 事

はい。最初は、二階堂さんとか島原さんとか地域のこの異業種の皆さんが集まってスタートされたということなんですけど、きっかけは、どうしてこれをやろうとされたんですか。

○事例発表者（二階堂）

実はですね、商工会議所の中に地域振興センターがございまして、その地域振興センターの中の事業として大竹の晴海の地区で日曜日というのを開催しておったんです。その日曜日へ参加する商店ですね。例えば島原さんところも農業の商品持って来られるし、中川さんという方はうどんとかそばとかラーメンとかいうのをやっている。あと私は趣味でベーコンとか納豆とか焼き芋とかそんなものをやっておりましたので、そこを中心に集まりまして、ちょっとお互いが知り合って大竹をなんとかしようじゃないかということから始まったと思います。

●知 事

何か大竹の名産をつくりたいなど。

○事例発表者（二階堂）

そうです。

●知 事

それで委託事業がある間は、比較的にやりやすいと思うんですけども、それが終わったときに自立もしなければいけないし。

○事例発表者（二階堂）

そうです。

●知 事

皆さんご自分のお仕事もあるわけじゃないですか。

○事例発表者（二階堂）

やっぱりひとつ、原木シイタケがですね、この地域では非常に少ないんですよ。そして、それをやはり一つの柱にして年間生産を行えば、ある程度の雇用ができるということからそれをやっぱり重点に置いてやってきました。

●知 事

自分のところの会社をやるだけでも大変だと思うのですけれど。

○事例発表者（二階堂）

ええ、もちろんそうです。

本業があるもんですから十分なことはできないのですけれど。

●知 事

でも、やろうというその原動力は何でしょうね。

○事例発表者（二階堂）

そうですね。やっぱり地域の、大竹の商品ブランド化というのを農業の中でひとつつくりたいというのが大きかったと思うんです。こういうことを我々がすれば栗谷の地区でやってますけれど、例えば大根が足らなくなったらその地域の人から提供を受けたりというようなことで、地元を生かすことができるんじゃないかなということもありました。

●知 事

なるほどね。皆さん、それぞれお仕事があってお忙しいと思うのですけれど、こうやって新しいものに取り組んで、それをちゃんと採算に乗せて、フェイスブックやったらどうかとか言われたら、うん、やってみようかなという感じで、一言でいうとやっぱり、ラブ大竹ということですかね。

○事例発表者（二階堂）

そうですね。

（笑）

●知 事

もう大竹が大好きで、大竹の名産をつくりたい。大竹の何かいいものを知ってもらいたい。そういうことでしょうかね。

○事例発表者（二階堂）

そういうことです。隣にいる島原さんが非常に農作業のほうでも農家と一緒に取り組んでいまして、随分力になっているんです。いろいろな苗を植えたりとかですね、収穫したりとかいう忙しいときにやっぱり地元で、私は農業は分かりませんが、こういう人たちが、農業を知ってる方がその地にいらっやって、仲間ですから非常に助かっております。

ひとこと何かありませんか。

（笑）

●知 事

いや、どうぞどうぞ。

○事例発表者（二階堂）

今日、ちょっと飲んでいただいたのですけれど、スープを作ってきていただいて、それに生七味を入れて召し上がってもらったらそのおいしさがわかるんじゃないかという彼女の発案で、今日そういうことになったんです。そして、食べるラー油も、キュウリをスティック状にしてつけて食べるとビールのつまみになったりとか、いろいろと簡単に食べることができるので、それも彼女の提案で今日は実際につくっていただきました。

●知 事

なるほどなるほど。

○事例発表者（二階堂）

そこはよかったと思うんですが。

●知 事

そうですね。さっきの地域ジンのお話もそうですけれど、いろいろな特技のある人が集まって、みんなの力が集まるといろいろなことができるという、そういった例ですかね。

○事例発表者（二階堂）

そうですね。もう船が進んでおりますのでね、絶対沈めないようにやっていかなければいけないということで、多少の荒波も乗り切っていけるように皆さんのご協力をお願いしたいところです。

●知 事

はい、ありがとうございます。皆さんも生七味とかラー油とか、召し上がったことある方いらっしゃると思います。

○事例発表者（二階堂）

ありがとうございます。

●知 事

ああ。3分の1ぐらいですかね。ぜひほんとに生七味，僕もさっきいただいたんですけど，すごくおいしかったです。

○事例発表者（二階堂）

ありがとうございます。

●知 事

はい。「ラブ大竹」でいろんな特産品をつくって頑張ってください。大竹特産ゆめ倶楽部，二階堂さん，島原さん，ほんとうにありがとうございます。もう一度拍手を。

（拍手）

○事例発表者（二階堂）

ありがとうございました。

（拍手）

事例発表③

●知 事

はい。それでは，今日はだいぶん時間が超過をしておりますが，最後の発表をお願いしたいと思います。

県立大竹高校3年生の立花真優さん，坂井麻友美さん，木下明美さんであります。この三人ですけれども，皆さんは「大竹高校家庭クラブ」に所属をされて，大竹市の特産品を用いたアイデア料理の研究を進めていらっしゃるということであります。また，小学生へ

の料理教室や中学生への出前授業，地域のイベントでの試食会など通じて開発したアイデア料理の普及に努めて，大竹市の特産品を通じた地域とのつながりをつくっておられるということでもあります。

発表のテーマは特産品で大竹を元気にです。

それでは，よろしくお願いします。

○事例発表者（大竹高校3人）

気をつけ。礼。お願いします。

（拍手）

○事例発表者（立花）

特産品で大竹を元気に。広島県立大竹高等学校家庭クラブ。

皆さん。「学校家庭クラブ」をご存知ですか。（「はい。」との声あり）

（笑い）

○事例発表者（立花）

どんな活動をしていると思いますか。

野球部，テニス部，茶道部といえ活動内容はわかると思いますが，「学校家庭クラブ」とは野球部のように生徒会に属する部活動とは違い，家庭科の教科に属するクラブです。家庭科の学習を通して学んだことを生かして学校内外で問題点を見つけ解決していく組織的な活動です。

高等学校では各高校の特徴に合わせ，さまざまな活動が行われています。

私たち「大竹高校家庭クラブ」では大竹を特産品で元気にしていこうと大竹市特産品アイデア料理の研究に取り組んでいます。このテーマに取り組んで5年になります。大竹市の特産品を通して地域とつながりをつくり，地域の課題や問題点を解決していこうと活動をしています。

大竹市の特産品としてはシイタケ，イチジク，カキなどが有名でこれらを使った加工品でカキみそラー油やイチジクジャムもあります。そして，平成27年，今年の冬から本格的に出荷が始まる阿多田島の「ハマチ to レモン」です。

イチジク。昔は大竹から西広島までの2号線沿いはイチジクロードとも呼ばれるほどイチジクの木が多い地域でした。その名残りは今もあり，大竹高校の近くの道路沿いにもイチジクの木はあります。

私たちはJA農協さんのご協力のもと，イチジク狩りを体験し，イチジクの特徴について学んでいます。

「ハマチ to レモン」。大竹市阿多田島はハマチ養殖が盛んです。生産量全国1位のレモンを餌に混ぜて育てているのです。魚臭さが少なく食べやすくおいしいと好評です。

これらの特産品を用いたアイデア料理のレシピ数は現在21種類です。自分たちが考えたアイデア料理がレシピとなり形になっていくことがとてもうれしいです。考案したレシピは各種料理コンクールに応募しています。これまで全国大会へ出場したもの、湯来町のコンテストでグランプリを受賞したもの、ほかにもさまざまなコンテストで入賞しています。

そして、今年の「大竹市政60周年学校給食メニューコンテスト」では「ハマチ to レモン」を使った「ハマチのベジ茸あんかけ丼」が最優秀作品賞となり、1月27日に大竹市内の小中学校の給食に登場しました。私たちも大竹小学校の1年生の教室で配膳を手伝い、一緒に給食を食べました。普段魚が苦手な残すことが多い児童が、おいしいと言いながら完食する姿やおかわりする児童の様子をみてとてもうれしかったです。

○事例発表者（坂井）

考案したレシピを多くの方に知ってもらいたいという思いから始めたのが、地域のお祭りなどのイベントでのアイデア料理の試食販売会です。

毎年11月に行われる大竹市の「コイ・こいフェスティバル」ではアイデア料理の試食会とともにアンケートを実施し、感想や改善点などについて記入していただいています。私たちの活動を知り、「これからもどんどん新しいレシピを考えてね。」と声をかけてくださり、とても励みになります。

「マロンの里の春・秋まつり」では無花果クッキー、無花果焼きドーナツ、米粉和ドレーヌを販売しました。わざわざ私たちの作品を買いに来てくださった方もおられ、本当にうれしかったです。準備したものは全て完売することができました。私たちの活動に関心を持っていただけていることにとても喜びを感じています。

また、マロンの里交流館のレストランでは、2年前より定食メニューに家庭クラブ考案のコロッケとシイタケのてんぷらを採用していただいています。さらに「ハマチ to レモン」の販売にあわせて「ハマチのベジ茸あんかけ丼」をメニューに加えていただけないかと試食会を開き、検討していただいています。メニュー化が実現した際には皆さん、ぜひ食べに来てください。

さらに、昨年からは地元の小中学生とアイデア料理教室を通して交流を行っています。小学生を対象に8月11日、大竹市と大竹高校の連携授業、らんらんカレッジ2015サマースクールでアイデア料理教室を開催。15名の小学生と保護者の方と一緒に無花果クッキーと米粉和ドレーヌをつくりました。

8月21日、栗谷小学校の児童7名と一緒に無花果焼きドーナツをつくりました。イチジクを初めて食べるという児童もいましたがみんなで楽しく料理をしながら交流を深め、つ

くり方の説明と一緒に大竹の特産品についてお話しすることができ、大竹の特徴をPRすることができました。

中学生とは玖波中学校の家庭科の授業で「おお茸WAツ！コロッケ」を一緒につくりました。今年は「ハマチのベジ茸あんかけ丼」に挑戦したいと考えています。

これからも地元の農畜産物や特産品を用いたアイデア料理の研究を行い、アイデア料理の普及活動を通して地域の方とのつながりを深めていきます。そして、大竹市の特産品をPRすることで、少しでも生産者の方や地域のお役に立ちたいと思っています。

以上で、特産品で大竹を元気に。「大竹高等学校家庭クラブ」の発表を終わります。

気をつけ。礼。ありがとうございました。

(拍手)

●知 事

はい。ありがとうございました。

家庭クラブの活動の内容はよくわかりましたけども、ネーミングもなかなかおもしろいですね。ベジ茸あんかけ丼っていうのも、噛みそうでわかりやすい名前だったりとか、和ドレーヌとかね。何か、うまい何とかっていうのもありましたね。

うまいのまいがお米でね。これ、みんなでアイデア出すんですか。

名前はみんなが決めるのかな。

○事例発表者（立花）

名前は先生と私たちで決めます。

●知 事

先生にも入ってもらってね。なるほど、なるほど。

小学生と一緒に給食を配膳をして食べたりしておいしいって言われるとやっぱりうれしかった。

○事例発表者（立花）

はい、うれしかったです。

●知 事

そうですか。

で、さらにね、おまつりとかに出て販売をする。これもやっぱり自分たちで、もっと知ってほしいっていう感じで始めることにしたんですか。

○事例発表者（立花）

はい。

●知 事

なるほど。関心を持ってもらえるとうれしい。やっぱり、お話を聞いてもらったりとか、買ってもらったりすると嬉しくてやる気が出る。

○事例発表者（立花）

はい。嬉しいですし、もっと頑張ろうと思います。

●知 事

この大竹高校の、家庭クラブの皆さんの活動も「ラブ大竹」ですよ。ね。「ラブ大竹」の結果として、学生としてできることをやっていただいているのかなと思うんですけど、それを皆さんがほっとかないっていうことでも、またこの活動が活発になるということなんじゃないかなあと思うのですけれども。ぜひまた地域の皆さんと一緒に頑張ってくださいね。

○事例発表者（坂井）

今日、このレシピと「和ドレーヌ」をつくってきたので、数が少ないのですが興味のある方はあとで私たちのところへお越しください。

（拍手）

●知 事

いただきました。ありがとうございます。

（拍手）

後で皆さん、数限定ですから、ご希望の方は、よろしくをお願いします。

それでは今日、とてもすばらしい発表をいただきました県立大竹高校3年生の立花真優さん、坂井麻友美さん、そして木下明美さん。もう一度大きな拍手をお願いします。

（拍手）

●知 事

ありがとうございました。

○司 会

はい、ありがとうございました。

以上で、予定の発表は終了となります。すばらしい発表を本当にありがとうございました。

閉 会

○司 会

それでは、ここで、湯崎知事に本日のまとめをお願いいたします。

●知 事

はい。それでは、今日発表をいただきました発表者の皆さんありがとうございました。

それぞれ公民館、地域の活動であったりとか、あるいは特産品をつくる、これは高校生の皆さんもそうだったんですけれども、そういう活動の中で、ちょっとでも活動をよくしたいとか、あるいは大竹を愛する気持ちをどう表現したらいいだろう。それを何とか自分ができることをやってみようということで、皆さんが力を合わせてやった結果ですね、やはりいろんな変化が生まれてるんじゃないかと思うんですよね。

公民館を、先ほどご紹介いただいたように全国でも表彰されるであるとか、そしてどんどん中学生も含めてこの仲間の輪が広がっていく。

特産品も、プロのほうはさすがですよ。T A Uで売れてるということで、東京駅の駅ナカショップ、ニッコリーナというところでこれも大賞を受けられたということで、あちらには、日本全国からいろいろなものを持ち込まれるので、なかなか大賞なんてとれないのではないかと思うんですけれども、でも、皆さんが頑張った結果ですね。

正直言って、大竹はそんなに大きな町ではないと思うんですよ。2万8,000人、3万弱の人口で、でも、これだけの活動があり、すばらしいことではないかなと思いますし、それを引き継ぐ高校生が、今から大竹の特産品をつくって頑張ってくれているということで、しかもこれ皆さん、何かこういうことがあったらいいよなというのを実践されているんですよ。一步、何か踏み出して実践をされることによって、大きく変化が生まれますし、またそれを、他人事だと、ああ何かやっているな、ではなくて、例えば、買ってあげるだけで高校生の皆さんはとても元気づけられるということで、本当にいろいろな人がいろいろな役割ができるのではないかなと。人ごとにしないで、何かやってみることによって大きな違いが生まれてくるんじゃないかなと。その積み重ねがですね大竹市を元気にして、また広島県全体を元気にしていくんじゃないかなというふうに改めて実感をいたしました。

ほんとにすばらしい活動だと思うんですが、決して何かスーパーなことじゃなくて、皆さんが自分たちのできることの中での活動だと思いますが、そういう活動をほんとにしっかり取り組んでいただいております今日の4組の発表者の皆様。改めて皆さん、大きな拍手をお願いをしたいと思います。

今日は本当にありがとうございました。

(拍手)

ぜひまた皆さんも、それぞれの職場や地域で、こういった一步を踏み出していただければと思います。

そして最後に、1つお願いがございます。

昨年の土砂災害はご承知のとおり、75名の方が広島市で亡くなりました。

こういった災害を再び発生をさせないために、広島県では、防災、減災対策にこれまで以上に力を入れて取り組むということにしておりますが、災害に強い広島県の実現に向けて、県民の皆さん、自主防災組織の皆さん、事業者、行政等が一体となって取り組む、「広島県『みんなで減災』県民総ぐるみ運動」というのを、4月からスタートをさせています。お手元に資料も配布をさせていただいておりますけれども、この運動では、5つの行動目標というのを定めて取り組んでいます。特に、大雨の多いこの時期です。身のまわりの土砂災害や洪水の危険箇所、避難場所、避難経路などをまずは知ることが大変重要であります。災害の危険箇所や避難場所につきましては、県民総ぐるみ運動・知るで、インターネットで検索いただけるんですけども、本日は、会場の後方にハザードマップという、危険な地域と、どんな危険があるかということを表示したマップを掲示をしておりますので、お帰りのまえに、ぜひご覧いただいて、ご自分のご自宅、あるいは職場のそばにどんな危険があるというのを確認をしてお帰りいただければと思います。

また、ご家庭でも、またご家族の皆さん、あるいは職場で、お仕事の仲間と確認をいただけると大変ありがたいと思いますのでどうぞよろしく願いいたします。

それで本日はどうもありがとうございました。

(拍手)

○事務局

湯崎知事、すいません。最後に私たち事務局から1つだけ皆さんにお願いをさせていただきます。

●知 事

はい。

○事務局

私は、県の広報課でツイッターとフェイスブックの担当をしております田村と申します。

皆さんは、広島県の公式SNSの存在はご存じでしょうか。

広島県では、フェイスブックやツイッターといったSNSを活用して、県政情報や、防災情報、県内のイベントやグルメ、お出かけ情報や観光情報などなど、皆さんの暮らしの

お役に立てる情報を日々発信しています。

本日、皆様にお配りさせていただいております封筒の中にもSNSの紹介のチラシ、オレンジ色のものなんですけれども、入れさせておりますので、ぜひ、ご覧いただいて広島県のフェイスブックにいいね、またはツイッターをフォローしていただければと思います。

大竹市の皆様の元気に負けないように広島県も元気にこれからもSNSで発信していきたいと思いますので、皆様どうぞ、いいね、もしくはフォローしていただけて応援をよろしくお願いいたします。

以上です。ありがとうございました。

(拍手)

○司 会

以上をもちまして、湯崎英彦の地域の宝チャレンジ・トーク、閉会いたします。

ご来場いただきました皆様、本当にありがとうございました。

(拍手)

なお、ご来場時にお渡しいたしましたアンケートを出口のほうで回収いたしますので、よろしくお願いいたします。

それからハザードマップ後ろのほうで知事からも紹介いただきましたけれども、ハザードマップありますのでご覧いただければと思います。

お気をつけて。お帰りの方はどうぞお気をつけてお帰りください。ありがとうございました。